



# 弘大農学部同窓会会報

## 第 2 号

昭和 58 年 10 月 31 日 発行  
発行 弘前大学農学部同窓会  
TEL. 0172-36-2111  
振替 盛岡 4-564 番  
印刷 (株) 笹 軽 印刷

## — 母校創立 30 周年記念にむけて —

### 創立 30 周年記念行事決定に当って

農学部長 佐々木 信 介

爽りの秋を迎え、津軽の山野は米とりんごの取り入れに追われています。りんごは大豊作が見込まれ、玉伸びも良く、味、色ともによろしいようです。ただ生産者は値段の安いことで頭が痛いようです。米の方は6、7月は異常低温で冷害必至と思われていたものが、8、9月の好天でもち直し平年作は確保できそうです。もっとも太平洋岸は不良のようで誠にお気の毒ですが。

異常といえば、今年は春先が非常に高温で、桜やりんごは例年より10日も早く開花したとのこと。それで桜まつりに入る前にお城の桜はもう散り始めるという様です。しかしそのあと6、7月が極めて低温で、ストーブを外せない程でした。5月26日には日本海中部地震があり、M7.7という大規模なもの。本学では医学部、病院に次いで農学部の被害が大きかったのですが、人身に係わるようなことは全くなく、不幸中の幸いと思っております。卒業生の方々から早速見舞いのお電話やお手紙を頂戴し、深く感謝しております。

さて、9月の教授会で30周年記念行事の内容が決定しました。記念式典は60年の7月5日(土)に行います。どうかこの日には二千数百名の卒業生が揃ってご出席下さいますよう今からお願い申し上げます。諸兄もこの日のために今からスケジュールに組み込んでおいて下さい。なお式典に付随して記念講演会

と祝宴も考えております。祝宴につきましては同窓会の主催でお願いすることになりました。教授会では、同窓生にあまりご迷惑をおかけしないようにという強い意向が表明されましたが、それでも何かとお世話になることでありましょう。宜しく願い申し上げます。

行事内容の詳しいことは、別にお知らせがあることと思いますので省略いたしますが、単なるお祭り騒ぎで終わるのではなく、過去を振り返って学部創設の意義を考えるとともに、これを契機に一層充実し、内容豊かな学部を発展させていくステップにしたいものと思えます。このような意図の一つのあらわれとして、最大の記念行事かとも思われる研究事業を企画しております。テーマは「農学研究からみた青森県農業の問題点と展望」というもので、教官全員が参加するばかりでなく、部門によっては卒業生のお力も借りたいと思っております。これも、地方大学として地域に根ざした研究を通して、日本農業、更には世界農業にも寄与したいとねがうからです。

今年もまた各地の支部会にお邪魔いたしました。そこで沢山の卒業生諸君がそれぞれ元気に活躍されておられるのを知り、嬉しく、感激して参りました。それは単に社会的地位とか、携わっておられる職種の内容とかに対するものよりは、この生きにくい現代に一人の人間として、いかに真摯に、明るく遅しく

生きているかという実証を直接この目で拝見し、この耳で拝聴したからです。

卒業生諸君、ますますご健勝ですばらしい

人生を力強く歩んで下さい。心からお祈りしております。

( 58・10・14 )

## 弘前大学農学部草創期の思い出

名誉教授 森田 昇

弘前大学に農学部を創ることの要請が時の知事津島文治氏から、以前県のリング試験場の技師をしておられた縁故で北大の島善鄰教授に懇請があったが、当時の北大も大学制度の切換時で而かも学生運動が漸く盛んにならうとしておる頃で、伊藤誠哉学長の補佐をしておられた島教授は直接自身で行けないからその替りを出そうという事になった。24年秋頃だと思うが、青森県の副知事をしておられた松野伝氏も説得に来られて、同期生だった田町以信男先生と旧化学教室の部屋で懇談された。私も同席してお話を承った。

その後、24年4月に田町氏、鹿討豊雄氏と私の3人で弘前大学を初めて訪ずれ、事務局長の高村峰蔵氏と色々懇談した。

農学部の敷地として候補に上っている土地を検分に行った。それは現在の土地と、松原の実業高校の土地であった。

当時は新設は全部県が負担で、それが中々確定せず、度々田町先生や高村局長が足を運ばれ大変御苦勞されたものである。当時聞いた話であるが、一足先に認められた岡山大学農学部の設立に当って、県から学校当局が即金で渡されたという事、大いに羨しがったものである。

文部省の手で新設をされるようになったのは農業工学科の設立の年からである。

結局そんな事情で、なるべく予算を教育研究費に多く当てたいという事、実業高校の土地なら建物から用意してかからねばならず、それだけ研究費が少なくなることもあって、現在の敷地に決定したのである。

もう一つ当時都市手当という物があり丁度農学部の敷地の一部がかかっているという事

で多少なりとも月給は多い方がよいだろうということになり、決定したと聞いている。

当時の情勢を考えて心底皆の思を思って田町先生は対処しておられたと思う。

25年に青木先生、照井先生が農学教室の助教教授になられた。その前に若党町に土地を買われその敷地内に2軒の住宅を買って移築された。それが現在の若党町にある官舎である。ともかくその頃の田町先生は農学部の創設に関りきりで、何時も局長と同道して、弘前と東京の間を往復しておられた。或る時は、風邪をひいて弘前へ帰られ、病院の当直室で医者から急性肺炎と診断され、大騒ぎになった事もあった。

文理学部の教授会でも、文理学部は弘高が昇格したものであり、私達は旧制の北大から来たという事で、栗原学部長等と田町先生達との間に意見の食違いがあったものである。

原因はこればかりでもなかったのだろうが、農学教室の途中から形式的には文理学部にあるが財政的には独立して事務局直属となった。そのため、当時農学教室のあった憲兵隊本部のところへ、事務長格で對馬定男君が事務全般に涉り雪森文夫君その他が色々農学科の世話をしてくれたものである。

26年に一応の態をなした形であるが、聴講の学生は30名ばかりであった。が、正式に農学科の学生となったのは同窓会名簿にもある通り、僅か4名であった。

又、当時農学部設立には結局は文部省であるが、大学設置審議会という機関があり、その認可がなければという事で、設立後も3年間は人事権もそこがもっているのである。

その会長が来られるという事になり、御挨拶

搦申し上げるということで、浅虫の東奥館でお逢いた事を昨日の様に想い出している。

その頃、田町先生は、当時教官室や教室、実験室が憲兵隊本部にあり、その教官室に病院から借りて来たベッドを持込んで寝起きしておられた。小使さんの清水さん、農夫の小館さんの世話で、その日暮らしの生活をして

おられた。

憲兵隊本部の中には、当時は福島先生のとこに留置場が残っていたり、旅団司令部の後ろに、物々しいコンクリートで囲った監獄があったのを記憶している人も少なくなったことでしょう。草創の頃を今更のように懐かしく思い出す今日此の頃である。

## 連載

## 農学部30年の歩み(1)

昭和60年で満30才を向える弘前大学農学部は、30年7月1日国立学校設置法の一部を改正する法律第44号が公布施行されその設置が認められ、名実共に文理学部より分離独立し、作物学、育種学、園芸学、植物病理学、応用昆虫学、農業経済学、畜産学、農業工学、土壌肥料学、農産製造学の10講座をもって発足されたものである。

しかし、その源は昭和25年10月文理学部理学科に開設された農学4講座に発しており、同27年に農学科が設置され他学科より転学科してきた4名が、同28年3月初めての弘前大学農学士として世に出たことは特記されるべきことであります。

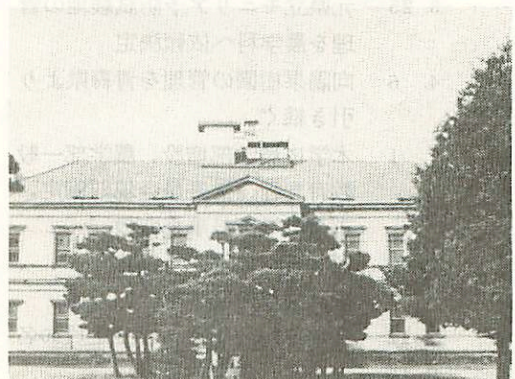
当時のことを弘前大学20年史には、次のように書いてあります。

『新制地方大学がオーソドックスな学問研究の府であると同時に地域社会の産業文化の開発進展を助けるという使命をもつものである。中略…そういう観点に立つ時、農業県としての青森県の地域的特性上、農学部設置はとくに必要と考えられたことだった。中略…しかし何ら足掛りとなる機関も施設もなかったため、4講座として出発せざるを得なかったわけである。しかし、その4講座からやがて農学科に進展し、次いで農学部として独立するに至るまでの経過は必ずしも単純でもなく、順調でもなかったのである。』

発足当時より幾多の苦難を乗り越え、教職員はじめ関係諸氏の献身的なる努力により昭和30年7月1日に学部へ昇格し、それ以後園

芸化学科、農業工学科、園芸学科と増設され、現在の4学科19講座、附属農場(藤崎、金木)の今日に至ったのであります。

当同窓会は、後述のごとく今年総会において農学部創立30周年記念事業を積極的に支援することを決定いたしました。そこで、農学部30年の歴史の一端を紹介し、同窓会々員各位に農学部30周年記念事業の意義をさらに深めていただくため、連載“農学部30年の歩み”を企画いたしました。なお第1回目は昭和30年代より以前のできごとを弘前大学20年史、および当時の学生便覧・学報を参考にして表・年表などをとりまとめたものであります。



旧農学部本館(元第八師団指令部)

## 年表 (弘前大学20年史より抜粋)

昭和					
25.	8. 1	農学科設立案, 本部に提出	31.	4	青森県農業総合研究所金木実験
	8. 31	青森県議会, 本学に農学部を設			農場の管理を全般的に農学部へ
		立することを決議			委任, 附属農場となる。
	10. 20	文理学部理学科に農学4講座開		5. 15	金木農場開場式
		設		9. 18	農学部学生, 市内下宿で神経衰
	11. 18	学長より青森県知事に対し, 青			弱のため縊死
		森県営実習農場の土地・建物の	11. 26		農学部, 教員の資格審査権を獲
		一部等寄贈を要請			得
26.	3. 7	文部省大学設置審議会総会, 本	32.	1. 9	農学部長古市誠没
		学農学科設置案を正式承認		10. 1	総合りんご科学研究所の創設準
	4. 1	文理学部農学科(専門課程のみ)			備開始
		開設 作物・園芸, 作物保護,	34.	11. 30	農学部に専攻科設置を文部省に
		土壤肥料, 農業工学の4講座			申請
27.	3. 15	文理学部に農学科増設学生定員	35.	4. 1	農学専攻科設置 学生定員5名
		40名		5. 12	金木農場収納舎火災
28.	7.	西ヶ丘町の水田を弘前大学後援		5. 12	農林省東北農業試験場園芸部
		会より本学(農学部)に移管			(藤崎町)の一部の農場使用承認
30.	1. 12	学長, 青森県知事に対し農学部	37.	4.	東北農業試験場園芸部の移転跡
		設置にともなう県有財産の寄附			地の附属農場として利用決定,
		要請。2.11 知事より回答			藤崎町への移管, 土地の管理も
	1. 20	農学部設置を文部省へ申請			本学に委託
	2. 10	学長, 弘前市長に旧向陽園跡地	38.	1. 28	文部省へ農学部の園芸化学科,
		の寄附要請。同12日弘前市長よ			園芸農学科設置届書提出(41設置)
		り承諾予定の回答		2. 27	農学部教授宮下利三没
	2. 14	農学部設置のため審議会委員3		4. 22	弘前大学農業改良普及員受託研
		氏来校			修生規則を制定 農学部規則の
	3. 25	元県立モニリア予防試験地の管			一部改正—入学定員園芸化学科
		理を農学科へ依頼決定			・園芸農学科, 各30名
	4. 6	向陽果樹園の管理を青森県より		6. 18	青森県知事, 文部大臣と本学学
		引き継ぐ			長に農業土木科設置を要請
	7. 1	本学に農学部増設, 農学部一般		7. 8	藤崎農場の農学部への移管完了
		教育課程運営委員会規則制定,		7. 15	弘前市議会議長より学長に対し
		古市誠学部長事務取扱			農業土木科設置の意見書
	7. 1	西ヶ丘町の水田を廃止		9. 27	藤崎農場開場式
	7. 1	附属図書館農学部分館設置	39.	3. 26	農学部向陽果樹園を廃止
	7. 12	農学部規則制定, 学生定員40名		5	学内水田で最初の田植え
	9. 16	古市誠, 農学部長就任			
31.	3. 15	農学部第1回卒業式			その他 35年10月には文理学部, 農学部,
	4. 1	附属施設として農場設置			本部合同秋季大運動会を行なったり, 36年10

月農学部学友会が学生、教職員等を会員として、農学部の発展と会員相互の親睦をはかるため設立され、収穫感謝祭と卒業生送別会、新入生歓迎会等が行なわれた。また機関紙「オリザ」を発行するなど学友会が改組されるまで続けられた。このように30年代までは開学部期の職務繁多の折にも、学生・教職員のほのぼのとした暖かい連帯感を感じさせる時代でもあったように思います。



空から見た農学部（昭和38年冬）

### 数字で見る農学部のうつりかわり

年度	学 部 長 名	教官数	職員数	卒業生数	学部予算	農 場		備考
						予算	収入	
昭和 27		19		4	(7,682)	—	—	文理学部 農学科 (教官数は 農学科)
28		18		3	(9,334)	—	—	
29		19		4	(9,525)	—	—	
30	古市 誠	21	18	8	2,943	—	—	
31	照井陸奥生(1.9~) 菊地武直夫(3.1~)	22	19	23	5,047	2,370	3,179	
32	〃	22	20	40	6,072	3,142	3,209	
33	〃	22	20	26	6,466	3,050	3,317	
34	〃 照井陸奥生(11月~)	22	23	31	7,117	2,948	3,386	
35	〃	22	28	26	7,058	3,364	3,515	
36	〃 津田守誠(11月~)	24	35	33	8,405	3,924	3,451	
37	〃	24	53	39	8,650	3,484	4,686	
38	〃	23	53	30	10,130	4,027	4,338	
39	照井陸奥生	24	56	28	12,071	4,226	5,267	

### 農学部で決定された創立30周年記念 事業内容ならびに取り組み状況

#### 事務局

前年度の総会（昭和57年）において、同窓会は創立記念事業の全面的支援を決定致しました。一方、農学部教授会は今年の3月に、学部として創立記念を行なうことを決定しました。そして、4月には記念事業内容の具体化のため、学部内に記念事業委員会をもうけ、以来3回の委員会を開催し、記念事業内容を検討してきました。

なお、委員会には同窓会から会長と、幹事

（豊川）の2名が参加してきました。その結果、9月の教授会で決定された事業内容は、次のとおりです。

#### 農学部創立30周年記念事業内容

##### 学部主催

項 目	担当代表者	予算額(万円)
1. 記念式典(昭60.7.6 第1日曜日)	森教官、同窓 会長、事務長	10
2. 記念講演会	森 教官	5

3. 記念植樹	奥村教官	50
4 図書購入	原田(幸)教官	100
5 教官研究業績	金須教官	0
計		165
(200万を限度する)		

## 同窓会主催

1. 祝賀会(昭60.7.6)	同窓会	200
2. 記念誌(30年の歩み)	篠辺教官	500
3. 記念絵はがき	原田(順)教官	10
4. 彫塑	教育学部,美術科	200
5. 教官研究業績別刷		50
6. 事務・予備費		140
計		1,200

予算執行上の配慮のため、前記のとおり事業は学部と同窓会の負担を区別しておりますが、実際に事業を行なうにあたっての担当者については、学部教官の全面的協力の意を得ております。

同窓会担当の事業内容について11月末日詳しく御案内致しますが、簡単に説明しますと、祝賀会は農学部関係の招待者200名を数えております。記念誌は、「30年の歩み」と題したように、内容は単なる歴史書ではなく、元教官などの談話や、学生時代の思い出、あるいは、校舎の写真、随筆投稿などを編集し、同窓生全員の冊数分を考えております。これら2事業は、いずれも大目の予算額で計上しております。もう一つの大きな予算額である彫塑は、記念として形のあるものを学内に残すために考えました。教育学部の先生に依頼する計画ですが、これは、予算の見通しが立てば正式にお願いすることになります。

その他、記念絵はがきと教官研究業績別刷がありますが、絵はがきは、現在や昔の校舎が中心になろうかと思えます。また、教官研究業績は、これまでも記念事業で同窓生にさしあげてきましたが、母校の先生方の日頃の御活躍の一端を、あるいは、農学部全体の動向をお知らせする機会になります。

なお、別枠として、農学部と同窓生が一体

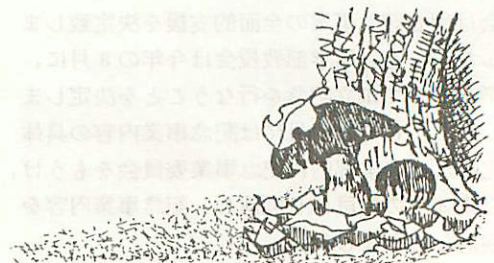
となって、「農学研究からみた青森県農業の問題点と展望」を発刊することが決っております。これに係る事業は、青森県ならびに学部研究費を当てることになっております。

醸金額が目標額を上まわって可能となれば、同窓生に対して記念品を出したらよいという意見も多いので、できれば対応したいと考えています。記念事業予算額は1人1口として1,200万円を最低目標としています。

弘前大学農学部は、30周年を向え、卒業生も各界において、ようやく定着してきた段階にあります。しかし、同窓生の過半はまだ30才前の若い皆さんです。同窓生の皆さんはもちろんのこと、同窓会も所帯は大きくなって、組織、経済面などで困難の多い時期と考えております。したがって、記念事業を成功させるためには、同窓生全員の結集をお願い致したいと思っております。

なお、記念事業推進にあたって、去る8月27日に、青森において醸金方法に関する最終会議を開きました。青森県内に在住する方を中心に、学科・卒業年について、できるだけむらなく100名に案内致しましたが、30名の御出席を得ました。

1口5,000円とし、1人2口以上を目標とすること、59年末を期限に、分割醸金方法もとり入れることで、全員の賛成を得られましたので、この方法で取り組むことになりました。具体的醸金方法について、11月末日まで御案内しますから、御協力をお願い致します。



## 定期総会報告

## 前年度事業ならびに会計報告

## 1. 事業報告

- 1) 教授会は母校創立30周年記念事業を行なうことを決定
- 2) 同窓生名簿57年版発行
- 3) 同窓会会報1号を発行
- 4) 支部活動の強化と、関東(東京周辺)、北海道、岩手、青森県南部の4支部結成
- 5) 会費納入額、5百万円達成(会計報告参照)

## 2. 昭和57年度会計報告

## 収入の部

費目	決算額	備考
前年度繰越金	1,772,862	
一般会費	5,111,330	
入会金	274,450	
貯金利子	50,098	
計	7,208,740	

## 支出の部

費目	決算額	備考
事業費		
会員名簿発行費	2,371,560	
新入正会員歓迎経費	134,480	卒業パーティ記念写真
支部協力金諸経費	397,850	特別会員等の出張旅費など
会議費	309,410	総会案内状等
事務費		
事務管理費	444,850	
事務用品費	261,881	
通信印刷費	266,590	
その他	5,730	弔電香料
次年度繰越金	3,016,389	
計	7,208,740	

## 3. 規則改正

次のように——線を改正致しました。

- 1) 第5条6 評議員  
総会において、正会員より20名以内を選出する。
- 2) 第10条
  1. 会費、正会員1年度(2年間) 3,000円
  2. 会計年度は4月1日から、翌々年3月31日までの短年度とする。

## 申し合せ事項

次の2項が追加されました。

- 1) 同窓生名簿のみは会費納入者へ配布する。
- 2) 学部中退者の入会希望者は正会員とする。

## 4. 役員選出

次のような交替、増員が承認されましたが、この他は重任となりました。(敬称略)

- 1) 監事  
相馬英三(農31卒)から、中尾良仁(農32卒)へ
- 2) 評議員  
小山内俊一(園56卒) 木村郁夫(園47)  
蒔苗 龍一(工45) 福士昭夫(農38)  
佐々木秀博(農38) 野村忠弘(農35)  
久保 淳(農34) 原田順厚(農31)
- 3) 事務局幹事  
会計 藤田隆から宮入一夫  
情報 木村繁昭から工藤 明

## 新年度(58~59)事業ならびに予算計画

## 1. 事業計画

- 1) 30周年記念事業の支援
- 2) 総会、役員会の開催(昭和60年春)
- 3) 同窓会会報2号、3号発行(全員配布)
- 4) 昭和59年版同窓生名簿の発行(59年末)
- 5) 58、59年度新入正会員歓迎会

## 6) 支部組織の強化と拡大

(山形, 宮形, 秋田支部創設を支援)

## 2. 昭和58~59年度予算計画

## 収入の部

費目	決算額	備考
前年度繰越金	3,016,389	
一般会費	3,000,000	
入会金	1,350,000	
計	7,366,389	



## 支出の部

費目	決算額	備考
事業費		
会員名簿発行費	1,700,000	
会報発行費	800,000	2回分
新入正会員歓迎経費	250,000	
支部協力金諸経費	900,000	
会議費	500,000	
事務費		
事務管理費	700,000	
事務用品費	50,000	
通信印刷費	250,000	
予備費	1,916,389	30周年記念事業準備費を含む
計	7,366,389	

## 教室だより

## 〈果樹園芸学講座〉

我教室は北側校舎1階にあって、教官・学生の居室が内庭に面し、見はらしはよくないが、夏涼しく、冬暖いという温度環境に恵まれた位置にある。昭和44年園芸学科が設置され、果樹園芸学教室として歩み始めて、早や14年経った。この間教官スタッフに変動があった。現名誉教授の青木二郎先生が昭和49年定年退官され、爾来菊池卓郎教授、浅田武典助教授の2名で構成している。助手は不在で、代わって実験助手の田村美代子女史が補佐している。青木先生は今なお大変お元気で、諸外国のリンゴ栽培についての情報収集等、学問探求に余念がありません。卒業生の動向をみると、昭和48年からのこの12年間に81名を送り出しており、昭和31年から昭和47年までの園芸教室の卒業生数63名を上まわった。81名のうち、県内出身者は51名、64%を占める。そのうち、県内に就職した人は45名、56%で若干低くなるが、県内出身者のほとんどが県内に職を得ている実態を示す。職種についてはどうか。園芸学教室時代と比歎すると、ほ

ほ同じであるが、2、3の点で変わってきているようである。農業、公務員、教員、団体職員、関連産業、その他と分けてみると、公務員がトップを占める点は変わらないが、最近では教員が減って、自営（農業）とその他が増えている。これらの動向の変化の背景には、毎年平均8名の学生所属で絶対数が多くなったこと、女子学生の占める割合が約1.5人と増えたこと、さらに推せん入学制度（昭和54年第1回卒業）の採用と、推せん入学者の多くが当教室を志望していること、などのことがあるものと思われる。ところで、教室の仕事は従来と同様、リンゴの栽培技術に関連した事柄を扱っている。藤崎農場の塩崎雄之輔助教授（昭和41年卒）と協力しながら、最近リンゴ栽培上重要課題となっている密植栽培に関するテーマを中心に活動している。

最後になりましたが教室では、園芸学教室および果樹園芸学教室を卒業された皆さんの近況報告なり、直接訪問なりを期待しております。（T. A 記）



### ＜農業機械学講座＞

当講座が設立されたのは昭和41年だそうですが、今日までスタッフの顔ぶれが多少変わっています。当時おられた戸次先生は農業動力学講座に移られ、44年に加藤弘道助教授が、46年には福地博助手（私）が着任し現在に至っています。御大森田昇教授は47年3月に停年退官になられ、後任の高橋俊行教授が8年間おられましたが、現在はこの会報の第1号で自己紹介されている金須正幸教授に変わっています。研究室も北側の3階に整然（？）と並んでおります。なお森田先生は益々お元気で日本中を飛び回っておられる様子ですし、高橋先生も北里大学（十和田市）で元気に御

活躍されています。スタッフの詳しい紹介や研究室の様子は、56年の農業機械学会東北支部報に、当時の院生玉田君の書いたものがあります。興味のある方はそちらもどうぞ。

ところで農業機械学講座としての卒業生は第1回の45年以来、今年で14回目になります。お隣りの農業動力学講座と合わせた農業機械コースとしては161名の人達が全国に散らばっていることになります。ただ音信不通の人達が数人いるのは残念であります……。さらにもう一つ残念なのは、いまだに女子学生が一人もいないことです。

（H・F 記）

## 支部だより

### 山形支部総会からのたより



「先生、しばらくです。」「やあ、〇〇君だったね。しばらく会わないうちに随分薄くなったね（頭のこと）。」「いや、いや、先生こそ、すっかりきれいになられましたね（髪が真っ白）。と、まあこんな具合に、山形支部の総会は8月27日、天童温泉で開幕となりました。

山形勢は総数36名（農学系13名、化学系11名、工学系3名、園芸系9名）。

本部（豊川先生）の御支援もあり、8月25～26日、天童市で畜産学会が開催されたのを

機会に、高安、斎藤、村山各先生の御列席をいただいて、同窓生の出席は11名と少々淋しい感じでしたが、雰囲気だけは盛大に挙行するはこびとなった次第です。

初対面の顔、久しぶりで会った顔、最初は少々、よそゆきだった面々も、飲むほどに、酔うほどに盛り上がり、話題は学生時代に遡ります。

学校のこと、先生方のこと、友人のこと、北溟寮のこと、果ては旧悪の数々、等々。

先生方の頬もゆるみみっ放しで、最後はスク

ラムを組んで北溟寮々歌の大合唱と、和気合々の一夜でした。

山形支部は若い気鋭の会員が多く、多忙なこともあります。全体のまとまりとしてはもう一步のところ。今後とも、会合を継続して名実ともに同窓会支部として、他大学に負けない組織に育てていきたいと考えておりますので、運営についての意見や、住所、職場の変更等、事務局まで御連絡いただければ幸いです。

ば幸いです。

なお、今後とも本部の御指導と、在学中の学生諸氏は率先して山形県に就職され、御活躍されることを期待しています。

(支部世話人 大竹俊博)

山形県支部事務局

〒990 山形市松波2丁目8-1

山形県庁農業技術課 鈴木 武

TEL (0236)30-2435

## 福島支部総会に参加して

福島支部総会は6月4日平市で開かれ、松本支部長はじめ19名(県内在住者の56%)が出席、農学部より佐々木学部長、工藤(事務局)の2名が参加させていただきました。

今回が初めてという黒沢氏(33年卒)から新入会員である横山氏(58年卒)まで幅広く参集され、盛大かつなごやかな懇親会でした。毎年通り、会津、浜通りと順に回って

ゆくそうですが、是非、又参加したい支部の1つであります。フレッシュさと団結の固さに感心して帰弘いたした次第です。これから益々、福島支部が御発展され、又会員の方々が御活躍されることを期待しております。

総会参加の際は会員の方々に色々とお世話になり、ありがとう御座居ました。

(工藤 記)

以上のほかに、開催された支部会は次のとおりです。

**青森県支部** 58年4月11日 青森市  
佐々木信介農学部長、篠辺三郎先生、豊川好司幹事出席 参加者60名

**関東支部** 6月11日 四ツ谷グリラエコー  
森敏夫農場長、森田昇元農学部長、矢橋

農吾現千葉大助教授、豊川好司幹事出席  
参加者50名

**北海道支部** 9月3日 札幌不二ホテル  
佐々木信介農学部長、卜蔵建治先生、豊川好司幹事出席、参加者40名

## 同期会(昭和38年3月卒業)

38卒生は三八会を結成し、4年に1回(オリンピック開催年)の割合で同期会を開催してきた。今回は卒後20年を迎えたため1年早く、4月30日に恩師を招いて、大鰐温泉でその祝賀会を開いた。当初30余名の参加が見込まれていたが、あっという間に2割減となった。その原因は身体の不調によるものであり、恩師の先生方同様、我々も身体のあちこちに故

障をもつ年令に達したことが感じられた。結局恩師7名(森田、中山、香川元教官、佐々木、今河、正木、原田幸現教官)と同期生39名中、北は北海道、南は大阪から17名が参加し、同期生の造った酒、豊盃で翌朝まで飲み、食い、歓談し、盛会であった。

我々は故田町・津田先生の最終講義を拝聴し、故宮下先生と香川先生(現青森農試場長)

の最後の授業を受講し、森、菊池、山内（現九州農試）、原田幸雄先生に最初に教わった学年でもある。

全学部生が必修であった農場実習は金木農場を主な場とし、夏休みには北海道今金町での農家宿泊実習、更に農学部へ移管前の藤崎農場でも一部行われた。

昭和36年には農学部学友会を文理学部学友会から独立させ、東北農学ゼミを積極的に熟

した学年であり、初めて教職員と学生と一緒にバスハイクした時期でもあった。更に海外移住研や農学部自動車部が発足し、その活動の盛んな時期でもあった。

このように話題豊富な時代であったため旧交も盛んで、同期会は毎回20名近い参加者がある。今後もずっと続けていくつもりである。

(K・K 記)

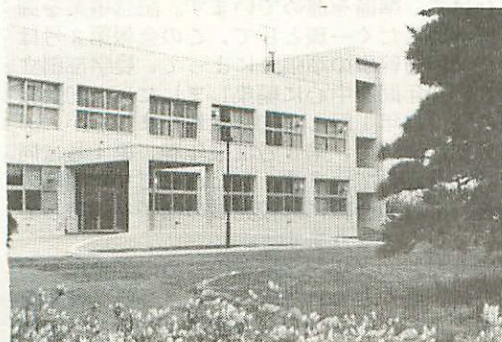


## 農学部附属藤崎農場新営 !!

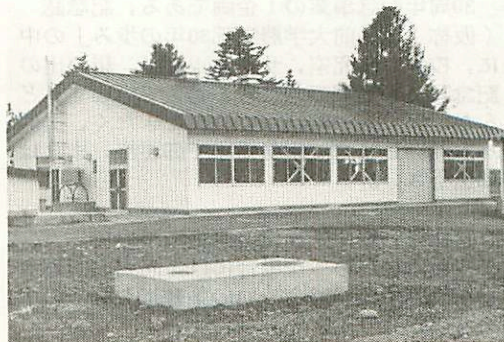
藤崎農場は、昭和38年農林省東北農業試験場園芸部が盛岡へ移転したのを機に、弘前大学農学部附属農場として発足し、土地（農地）、建物、施設等もそのまま移管され、今日までりんごを中心とした園芸作物栽培、管理についての教育研究が行なわれてきました。

ところが、数年前より建物、施設の老朽化がはげしく、再三文部省へ概算要求を行なっ

てまいりましたが、昭和57年度採択となり、57年8月に着工、58年3月に竣工いたしました。新営施設は、研究管理棟（901㎡）、加工場（280）、冷蔵庫（220）、大農具庫（200）、井戸で以前藤崎で農場実習を受けた我々同窓生にとっては、びっくりするようすばらしい施設となりました。



研究管理棟



加工場

学内人事

高安一郎助教授 教授昇任(7月16日)

浪岡 実 (36年作物卒)  
昭和58年度日本育種学会賞受賞

豊川 好司 (38年畜産卒)  
昭和58年度日本畜産学会東北支部会賞受賞

慶 事

中山林三郎名誉教授  
勲三等旭日中綬章叙勲  
(昭和58年4月29日)

弔 事

富岡 俊宏(55年農地卒)  
熊谷 実(46年農地卒)

同窓生の都道府県別分布(人, 昭和58年6月現在)

北海道	358	関 東	東 海	中 国	九州沖縄
		東京都 99	静岡県 20	鳥取県 3	福岡県 4
東 北		神奈川県 53	愛知県 13	島根県 1	長崎県 2
青森県	750	千葉県 72	岐阜県 1	岡山県 5	熊本県 3
岩手県	163	茨城県 22	三重県 9	広島県 9	宮崎県 2
秋田県	67	栃木県 12		山口県 2	鹿児島県 1
山形県	35	埼玉県 52	近 畿		沖縄県 2
宮城県	73	群馬県 13	滋賀県 9	四 国	
福島県	35	山梨県 3	大阪府 27	香川県 2	
			京都府 5	徳島県 1	
北 陸		信 越	奈良県 4	高知県 1	
富山県	4	長野県 14	和歌山県 3	愛媛県 1	
石川県	4	新潟県 20	兵庫県 7		
福井県	1				

事務局から一お知らせとお願い

☆農学部関係写真提供のお願い

30周年記念事業の1企画である、記念誌(仮称)「弘前大学農学部30年の歩み」の中に、校舎、研究室、サークルなど、思い出の記念写真を掲載できたらと考えています。どんな写真でも一時貸していただきたく、提供をお願いします。事務局まで御連絡、または郵送下さい。

☆勤務先、居住先変更の連絡について

変更事項があった場合には、同封の同窓会専用の郵便料同窓会払いの葉書にご記入の上、必ずお知らせ下さい。

☆事務局の最近の動き

来るべき昭和60年の創立30周年記念事業にむけて、準備を進めています。記念事業を御理解いただく一環として、この会報第2号は情報担当幹事の頑張りによって、農学部創立初期10年間を中心に編集しました。当初会報の発行は年1回とお知らせ致しましたが、30周年に向けて、第3号は来年春、第4号は同秋と計画しています。したがって10年間隔でそれぞれの会報に母校発展の様子を掲載していくこととなります。

なお、30周年記念事業のための贈金については、遅くとも11月末までには必要な書類を送るように準備しております。いきとどかない所もあるかもしれませんが、御支援をお願い致します。